

---

# 天使の言葉

海南

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使の言葉

### 【Nコード】

N6189E

### 【作者名】

海南

### 【あらすじ】

変わり者の修道士、ロン＝フィンダン。そして僕。変わらない平凡な日々、いつもロン修道士は僕に語りかける。世界のことや、命のことなど……。これは、そんなロン修道士と僕の会話の記録。

太陽がかなり上の方へ登ってきた時刻に、僕は教会に来ていた。窓から漏れている陽の光が、けっこう強いため、わざわざ蠟燭の火を灯さなくても手元の聖書の内容は十分読める。

たくさん並んでいる椅子の最前列に座り、パツと聖書を開く。目当てのページを見つけ出すまでに、そう時間はかからなかった。

僕の名はレイズ・カーマー。といっても、この名はもともとは僕のものではなかった。

第二次世界大戦後、勝者であるアメリカでも、身寄りのない子供たち　つまり、孤児はそう少なくはない。僕は、生まれてすぐに両親を戦争のせいで亡くした。その時の記憶はない。裏通りの捨てられているところをたまたま通りかかった聖職者の方に拾われて今に至るのだ。

レイズ・カーマーという名も、そのときに付けてもらった。

ステンドグラスを通して映る光の模様がとても美しい。しばしその光の芸術に見とれてから、手元にある聖書に目を落とす。

心を落ち着かせたいとき、不安を感じるとき、一人になりたいときには、必ず協会<sup>こい</sup>に来る。わざと難しそうな聖書を持ち出して、読むわけでもないのにペラペラと捲る。途中に出てくる挿絵に目を楽ませながら。いろいろな考えを巡らせている。

だから最初、協会に入ってきたもう一人の人物に気付けなかった。

「生きるとは、どういうことですか？」

突然聞こえた声に、一瞬驚いて振り向く。

そして、彼を見つけると、つい笑顔になってしまった。

ロン・フィندان修道士。いきなり現われてはいつの間にか消えているという。かなり変わった人だ。空に向かって大声で「オオー！！神よ！！！！」と叫ぶときもあるし、名前も知らない花に深々と頭を下げていたり、けっこう可笑しい行動が多いため、他の修道

士、子供には笑いにされている。

でも僕は、そんなロン修道士がとても好きだったのだ。

変だ変だと馬鹿にされながらも、子供に大きな愛で接し、小さな命も大切にする。何より、あの裏通りで奇跡的にも僕を見つけ出し、保護して下さったのがロン修道士だったのだ。

だから子供のころ、一番最初に心を開けたのは、ロン修道士だった。ロン修道士の後ろをテテツと付け回していた頃には、周りのみんなに「レイちゃんはロン修道士が大好きなんだね（ハート）」と何度も言われたが、それは間違っていないかつたし、今でも変わらない。

ふと気が付くと、ニコニコと人の良い笑顔のまま、ロン修道士は僕のすぐ傍に来ていた。

返事を待っているらしい。

「あなたの意見でかまいません。生きるとは、どういうことですか？」

「ええ……つと」と悩んでいるフリをしながら、チラリと時計を盗み見る。一時三十分。ロン修道士の話は最低でも二時間にする。

早くても三時三十分。最悪で六時か。

よしつ、と腹を括り、さっきの質問の答えを考える。だが、それほど深く考える必要はなかった。

「生きるとは、息をすることです。自分の意志で行動し、自分の感情で人と接することです。この世に存在し、命あるままに動くことです」

「よろしい」

うんうんと何度も深く頷きながら、ロン修道士はとても満足した笑顔だった。そして言う。

「では、死ぬこととは？」

質問が一つで終わるとは思っていなかったし、きっとこのことを言うだろうと見当をつけていたので、その質問にはすぐに答えること

ができた。

「死ぬとは、息をしないことです。自分の意思を持たず、感情は生まれず、この世界に存在することもできません」

「なるほど」

そう言ってもらえるのがとても嬉しくて、顔を綻ばせっていると、ロン修道士は予想していなかった三つ目の質問をしてきた。

「それでは、死んだように生きるとは？」

「えっ、えーと……」

この質問に、僕はとても焦ってしまった。

死んだように生きる……だから生きてはいる。だけど死んだようにってなんなんだ！？

悩み続けている僕を、ロン修道士は楽しそうに眺めていた。

「答えを聞かせてください」

「……し、死んだように生きるとは、辛うじて息はして  
いて」

「ほう、それで？」

「ええっと、意思是……無いから動けない……」

「なるほど……それで？」

「感情というのもきつと無いから」

「それでは死ぬことと変わらないのでは？」

「だから息をしていて」

「では死ぬということとは？」

「それすらもしな」

「生きるということとは？」

「……」

これは、その場凌ぎでしかない回答だということに、今やっと気付いた。ロン修道士、もっと人の考えが詰まっている、そんな言葉を求めているのだと。

本当の答えではなく、僕の考えを。

「息をするだけ……では、きっとないと思います。意思通

りに体が動くだけ、とか、感情を表にぶつけるだけ、とも違う。体の動かない人も、感情を上手く表せない人も、明日にでも死んでしまいそうな人でも……。やっぱり生きています。誰一人存在が分からないひとでも、やっぱり生きています。ただわたしには、わかりません。命があれば、だれでも生きていますか？命がなければ死んでいるのですか？目に見えて、手で触れるものしか、生きていないのですか？……。わたしには分かりません。生きるということが、死ぬということが。ロン先生。教えてください。生きるということを、死ぬということを、本当の答えを」

真つ直ぐに見据えた先には、ロン修道士の穏やかな瞳が僕の目を少しも逸らさずにしっかりと見つめていた。

僕は、そんな目が好きで、そしてとても憧れていたんだ。

「生きる死ぬを、言葉で言うのはとても難しいですね」

唐突に、ロン修道士は話し出した。しかし僕にはそんなことはどうでもよく、ただ答えが聞きたくて必死に耳を傾けていた。

「生きるとは、一体どういうことでしょうか？死ぬこととは？命の重さ、長さ、大切さは？誰も、正しい答えなんて本当は知らないんですよ。何も知らない中で、必死に自分の答えを探しているのです」

「では、ロン先生の答えとは？」

そう訊くと、ロン修道士は少し照れたように笑いながら言った。

「私の答えが聞きたいですか？」

頷くとロン修道士は、恥ずかしそうにしながらも、しっかりと答えてくれた。

ロン修道士の、答えを。

「わたしは、生きることと死ぬことは、裏表というわけではないと思うのです」

「なぜですか？」

「それはですね。人はみんな、生きながら死んでしまうこともありますし、そして、死んでしまってもなお、生き続けていることもあ

るからですよ……。生と死とは、きっとコインの裏表のよ  
うな単純なものではないのでしょうか」

ロン修道士の言っている意味がよくわからなかった僕は、少し首を  
傾げて黙りこくってしまった。

それを見て、「説明が少し足りなかったみたいです」と苦笑し  
ながらロン修道士は話して下さった。

「わたしの思う生きるということは、心の中に、あるいはもっと深  
い仲に一つの小さな炎を燃やし続けていることです。その炎が、生  
命<sup>のち</sup>なのか感情なのか……。そういうことはあまりよくわか  
りませんが、それ燃えている炎がフツと消えてしまうことを、死ん  
でしまうというのではないのでしょうか？ですから、生きていなが  
らも、心の中の炎が消えてしまっている人もいますし、死んでしまっ  
てもまだ、炎が荒々しく燃え盛っている人もいるでしょう。その  
人は、生きているのか死んでいるのか。わたしにはさっぱりわかり  
ません」

「心の中の……。炎ですか」

ボソツと呟いた言葉に、ロン修道士は敏感に反応して「はい」と言  
った。それでも僕の中には、まだわからないことがあります。だ  
「わたしの中にも、勿論あなたの中にも。心の中で炎はもえている  
のですよ。小さくても、消えること無いように、いつまでも続くよ  
うにと、必死になって燃え続けているのです」

炎が燃えていれば、死んでいない。しかし僕にはそれがよくわから  
なかった。

「命はなくなってしまうても、炎が燃えていれば死んでいないので  
すか？。でも……。命をなくして死んでしまうこと。僕にと  
ってはそれが一番の恐怖です」

そう言っているとロン修道士は、少し困ったような、そしてとても悲しそ  
うな顔をした。胸<sup>むね</sup>にそっと手を重ねると、一言一言をしつかりと噛  
み締めるようにゆっくりと言う。

「誰でも生命<sup>いのち</sup>がなくなるとはとても恐ろしいことです。とても痛

いですし、とても寂しいことだとおもうからでしょう。ですけれど、そんなときにはこの言葉を思い出して下さい。“怖いのは生命いのちが無くなることではなくて、生きる気持ちが無くなることです。心の炎はいつまでも燃え続け、わたしたちを照らし続けてくれるでしょう”

生きる気持ちが無くなること。それは、世界に絶望してしまった人たちのことを言っているのだろうか？そう考えると、悲しく、やりきれない気持ちで一杯になってしまった。

「先生は、いつもそう思いながら生きていますか？」

するとロン修道士は少し驚いたような表情となり、そして“心配いらないよ”と言うような優しい笑みを浮かべて答えて下さった。

「わたしも人間です。死に対する恐怖は勿論あります。しかし、毎日そうビクビクしながら生きる必要はないのですよ。生きている物全て、一日一日を楽しむ権利があるので」

「命を無くしてしまった人たちもですか？」

「勿論です」

死に対する恐怖と向き合って、毎日楽しく過ごす。それが、全ての人に与えられた権利なのだ。けれど、世界にはそれができない人がたくさんいる。

ロン修道士は、できているのだろうか？

「先生は凄いですね」

「そんなことはありませんよ。毎日を楽しんで生きていくことに意味があるのです。わたしもいずれ死んでしまふ身ですから」

そう言うってからロン修道士は、

「けれどわたしは、心に燃えている炎が一体なんなのかわかりませんから……まだ死ねませんね」

と、付け足すように言ってから、キレイに笑った。

そうしてロン修道士は、「嗚呼、もうこんな時間になってしまった。早く戻られければ」と言いながら教会を出て行った。



時刻は九時。あれから六時間三十分も経っていた。

あこのろの僕は、ロン修道士の言葉を半分も理解できていなかった。

今でもわからないことはたくさんある。

せめて、あの言葉は忘れないようにと、ここに書き残しておきたい。

いつか、ロン修道士の言葉を全てわかる日が来ることを、願って。

怖いのは、生命いのちが無くなることではなくて、生きる気持ちが無くなることです。心の炎はいつまでも燃え続け、わたしたちを照らし続けてくれるでしょう。

(END)

（後書き）

実はこれ、学校の授業で書いた没小説なんです。

なんか内容が、国語の授業でやったのとても似てしまって。友達に読んでもらうと「なんか × に似てるね」と言われてしまったので、仕方なく先生に提出することは断念したんです。

でも、せっかく書いたので、消してしまうのは勿体ないなと思ったのですよ。

ということで、ここに書かせてもらいました。

少しでも多くの人に、読んでもらえたらとてもうれしいです。

ここまで読んでくれてありがとうございます！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6189e/>

---

天使の言葉

2011年1月14日14時15分発行